

秋田県の伝統工芸品

SOU

ものづくりの地層に 想いをはせる

秋田県

伝統的工芸品に関する制度について

伝統的工芸品 国指定制度

伝統的技術又は技法が、100年以上の歴史を有し、一定地域で産地が形成されているもののなかから法令要件を満たすものについて、国が指定する制度です。全国では、200を超える工芸品が指定されており、このうち秋田県では現在、榺細工・川連漆器・大館曲げわっぱ・秋田杉桶樽の4品目が指定を受けています。

伝統的工芸品 県指定制度

約100年以上の歴史があり、伝統的技術・技法を用いて作られている等の要件を満たす工芸品を秋田県が指定する制度です。秋田県では、国指定伝統的工芸品4品目の他にも、イタヤ細工・川連こけし・秋田銀線細工・大曲の花火・中山人形の5品目を加え、9品目が指定を受けています。

伝統工芸士 認定制度（国）

一般財団法人伝統的工芸品産業振興協会において国指定伝統的工芸品の製造に従事する技術者の中から、高度の技術・技法を保持する方を「伝統工芸士」として認定しています。伝統工芸士は、産地で12年以上の経験を有し、実技・知識・面接試験を合格することで認定されます。

秋田県伝統工芸士 認定制度

秋田県伝統的工芸品の製造に従事する一定以上の技能等を有する方に称号を付与することにより、社会的な評価を高めるとともに就業意欲と技術の向上を図ることを目的とします。なお、秋田県認定工芸士では12年以上、秋田県みらいの工芸士では6年以上の実務経験を積むことが要件となります。

見学・体験施設一覧

国指定伝統的工芸品

大館曲げわっぱ

大館曲げわっぱ協同組合
〒017-0843 大館市字中町5-A
☎0186-49-5221
<https://odate-magewappa.com>

川連漆器

湯沢市川連漆器伝統工芸館
(秋田県漆器工業協同組合)
〒012-0105 湯沢市川連町字大館中野142-1
☎0183-42-2410 常設展示
<http://www.kawatsura.or.jp>

榺細工

仙北市立角館榺細工伝承館
〒014-0331 仙北市角館町表町下丁10-1
☎0187-54-1700 常設展示
<https://www.city.semboku.akita.jp/sightseeing/densyo/>

秋田杉桶樽

各作り手による製作体験会、展示会、販売会等を実施

秋田県指定伝統的工芸品

大曲の花火

花火伝統文化継承資料館
はなび・アム
〒014-0025 大仙市大曲大町7-19
☎0187-73-7931 常設展示
<https://hanabimuseum.jp/>

秋田銀線細工

矢留彫金工房
(彫金教室の体験レッスンとして)
〒010-0921 秋田市大町2丁目1-11 葉太庵ふるさと文化館 1階
☎018-838-1714 (要事前確認)

イタヤ細工

民芸イタヤ工房
(仙北市役所 文化財保護室)
〒014-0324 仙北市角館町小人町4松本家
☎0187-43-3384
(11月上旬～4月上旬は休館 要事前確認)

川連こけし

秋田ふるさと村の工芸展示館
〒013-0064 横手市赤坂字富ヶ沢62-46
☎0182-33-8800 常設展示

中山人形

秋田ふるさと村の工芸展示館
〒013-0064 横手市赤坂字富ヶ沢62-46
☎0182-33-8800 常設展示

地域を代表する工芸品

秋田塗

秋田市立赤れんが郷土館
〒010-0921 秋田市大町3丁目3-21
☎018-864-6851 常設展示

漆芸工房齋藤

〒010-0065 秋田市炭島7丁目1-7
☎018-863-5737
小中学生の団体向けに箸の研ぎ出し体験、蒔絵体験あり (要予約)

榎岡焼

有限会社榎岡陶苑
〒019-1846 大仙市南外字梨木田344-1
☎0187-73-1018 陶芸体験あり (要予約)

白岩焼

白岩焼和兵衛窯
〒014-0302 仙北市角館町白岩本町36-2
☎0187-54-4199 ギャラリーあり (要予約)

浅舞絞り

浅舞絞り藍染め保存会
〒013-0104 横手市平鹿町榎見内字砂子田37
☎0182-24-2266 製作体験あり (要予約)

秋田八文

ことむ工房
〒018-3301 北秋田市蔵子字戸草沢29
☎0186-62-0118 (要予約)

漆目銅

秋田市立赤れんが郷土館
〒010-0921 秋田市大町3丁目3-21
☎018-864-6851 常設展示

千貝工芸

〒010-1612 秋田市新屋豊町9-32
☎018-863-5803 工房見学、即売あり (要予約)

曲木家具

秋田木工株式会社
〒012-0862 湯沢市間口字川前117
☎0183-73-0123 本社ショールームのほか、工場での家具製作の様子を見学も可能 (要予約)

組子細工

タムラ木工
〒010-0201 湯上市天王権沼台249-14
☎018-878-6584 ショールームで組子細工の木製建具などを見学可 (要予約)

十文字和紙

十文字和紙 佐々木清男
〒019-0515 横手市十文字町谷地新田字中村93
☎0182-44-3520 (要予約)

能代帆

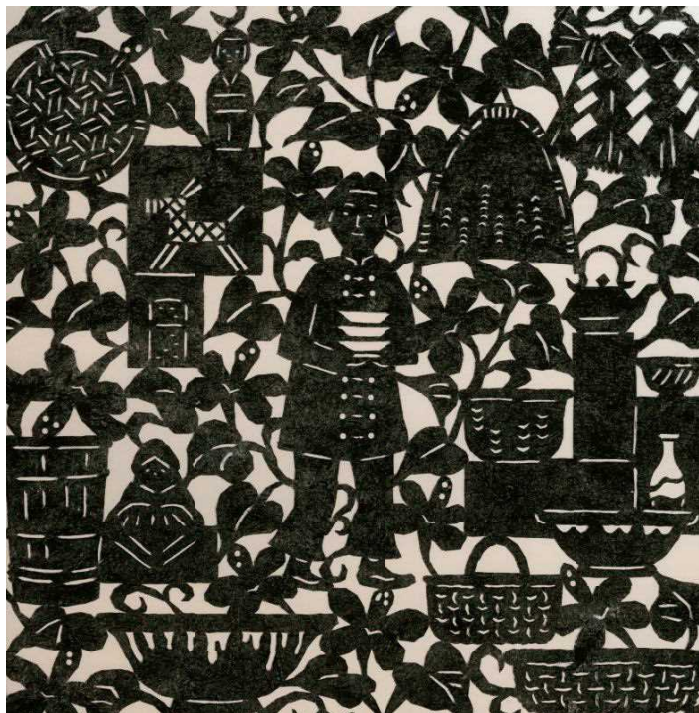
北村帆提灯店
〒016-0811 能代市日吉町7-3
☎0185-52-7978 (要予約)

湯沢帆

湯沢帆同好会
〒012-0857 湯沢市千石町3-2-40
☎0183-73-9428 (要予約)

本荘ごてまり

由利本荘市観光協会
〒015-8501 由利本荘市尾崎17
☎0184-24-6349 製作体験あり (要予約)



木村 衣有子 YUKO KIMURA

文筆家。1975年栃木県生まれ。2002年より東京在住、2006年より東北に通い続ける。主な著書に『味見したい本』（ちくま文庫）、『はじまりのコップ 左衛門吹きガラス工房宮間記』（重紀書房）、「家庭料理の窓」（平凡社）などがある。



北東北のシンブルをあつめにく
堀井和子

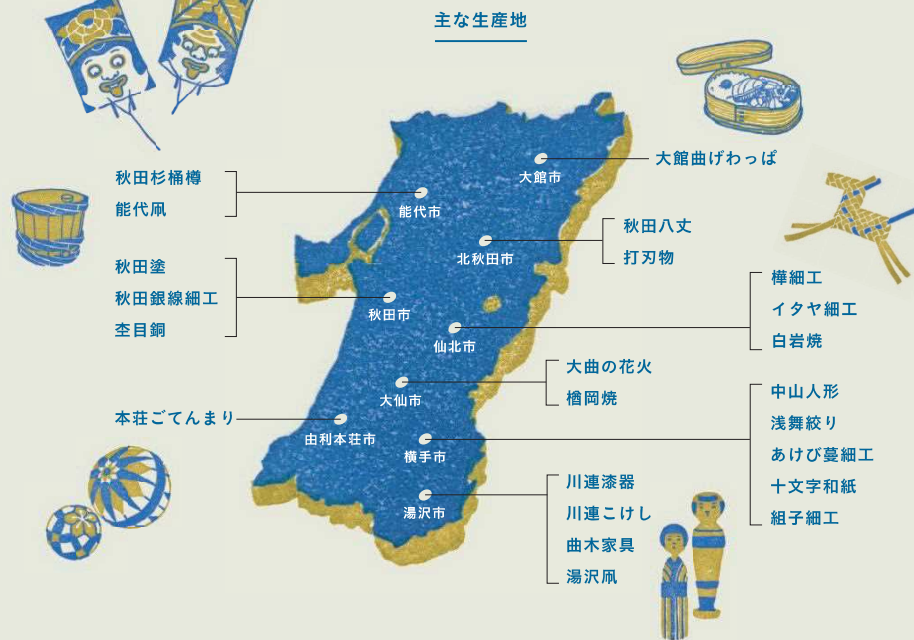
あ
る土地について知ろう
とするとき、郷土玩具を
よすがとして、一時
期がある。色使いや素材、表情のえ
がきかたからその土地らしさを垣間
見ようとしている。
「イタヤ馬」は、秋田にはじめて来
たとき手に取った郷土玩具だった。
時を同じくして刊行された、スタイ
リストの堀井和子さんのエッセイ
集『北東北のシンブルをあつめにく』
の表紙にもあしらわれていた。
この本は長いこと私の北東北巡りの
指針のひとつとなっていて、自分で
もこういう土地案内ができたならあ
と思わされる存在でもある。ついこ
ないだ、潟上市の「カフェ・ブレン
ナー」にて、お店の小窓にイタヤ馬
が飾られているのを目にして、そう
いえばババベラもあのときはじめ
て食べたんだっけ、などと記憶が引
き出される。またあるとき、男鹿の
民宿「里山のカフェ」にぎ〜で、洗
面所の窓辺に飾られていたイタヤ馬
は、ガラス越しの日差しを受けて、
ベージュから銚色に変わりつつあっ
た。リアルな馬の色に近づいてい
った。つこよかつた。

そういう郷土玩具に惹かれる心を
失ったわけではないものの、ここ10
年ばかりは、地元で作られた食器の
ほうに興味関心の軸が移りつつあ
る。水にくぐらせてみた、口をつ
けてみた、置いて眺めるよりもも
う一歩踏み込んだ付き合いをしたく
なつて。
そんな心持で求めた秋田の道具
は、たとえば、湯沢の「川連漆器」。
たまたま、あるラジオ番組をきつかけに
知った。「寿次郎」との屋号で工房
を営む佐藤史幸さんの話に引き込ま
れ、これはよさそうだなあとノート
にささつとメモしておいていた。寿
次郎さんのお椀や小皿の、ふつくら
した輪郭と飾り気のないなさは日常の一
角に組み込まれるのも早く、食器棚
に並んでいた他の器を押ししのけて
もつか最前列に出ている。
そして角館の「白岩焼和兵衛窯」
の蕎麦猪口や酒器、小皿。
ある冬の日暮れ、積もり積もった
雪面を夕陽が照らしたとき、この色
は白岩焼の青色、とはつとした。
たしかにその土地の色が器の上に置
かれていて、日照時間が日本一短い
秋田だからこそ、陽に照らされた
いにも心を配ることができて、そこ
から作陶のイメージネーションを得ら
れるのかもしれない。
今、ぐつと惹きつけられているの
は、寿次郎のペンダント、白岩焼の
ピアス。触れるよりもまたもう一歩
進み、身に付けてみたい、それは、
より秋田に深入りたい、という気
持ちのあらわれ。

秋田を知る道

2021年から東京と秋田の二拠点生活を始めた文筆家の
木村衣有子さん。秋田で時を重ねるうちに自然と木村さん
の暮らしにも秋田の工芸品が寄り添うようになり……。

秋田の風土が生んだ、 くらしによりそう手しごと



CONTENTS

02	エッセイ	秋田を知る道 木村衣有子
03	たべる	大館曲げわっぱ／川連漆器／秋田塗／榊岡焼／白岩焼
08	コラム	秋田の手しごと、好きなカタチ
09	いろどる	榊細工／大曲の花火／浅舞絞り／秋田八丈／秋田銀線細工／杢目銅
12	インフォメーション	秋田市の工芸品 展示のご案内
13	くらす	秋田杉桶樽／あけび蔓細工／打刃物／イタヤ細工／川連こけし／ 曲木家具／組子細工／十文字和紙
17	あそぶ・かざる	中山人形／能代風／湯沢風／本荘ごてんまり

国指定または県指定の伝統的工芸品にはそれぞれ本文見出しに「国指定」「県指定」と表記しました。特に記載のないものは「地域を代表する工芸品」です。



ウェブサイト 「手しごとと秋田」

「手しごとと秋田」は秋田県内の伝統工芸品を掲載したウェブサイトです。国指定または県指定の伝統的工芸品のほか、地域を代表する工芸品等の歴史や特徴などを紹介しています。



「SOU」について

SOUには「添う／創／展／想」の複数の意味があります。秋田の風土から生まれた、地域の暮らしに寄り添う秋田の伝統工芸品。ものづくりの創造性、連続性、継承とつづく技術の地盤を今に伝える伝統工芸品がつくりつづけられ、使いつづけられる未来を想って。

写真：高橋 希（オジモンカメラ）
プロセスクット&文：今村香織
スタイリング：冷水希三子 [p3,5,8,9]
イラストレーション：石山春香 (halu stamp factory) [p1]
版本真千代 [p2]
デザイン&ディレクション：株式会社See Visions

北国でじっくりと育った 天然杉でつくられる、暮らしの道具



1.伝統工芸士の奥田昌正さん。
煮沸したスギ板を口とよば
れる木型にあてて成形する
「曲げ加工」。2.曲げたスギ
板は木ばさみで留め、7〜10
日乾燥させて形を固定する。
3.スギ材の表面にやすりを
かけて滑らかに仕上げる作業。
4.サクラの樹皮でスギ材の
合わせ目を隠じる「桜皮とし」。

高樹齢の秋田杉が 料理をおいしく保つ

木の爽やかな印象が料理を引きたて、蓋を開けると杉のいい香りに包まれる曲げわっぱの弁当箱。スギ材が余分な水分を吸収し、通気性にも優れているため料理をおいしく保ち、軽いので持ち運びにも適している。

今とほぼ変わらない仕様の曲げわっぱが平安時代の遺跡から発掘されるほど起源は古い。その昔、林業を生業とする人々が杙目板を使って曲げ物を作ったのが曲げわっぱの始まりとされ、江戸時代には武士の内職として広がり産業として発展した。現在は弁当箱、おひつ、せいろ、カップなど、バリエーション豊かな木の器が作られている。流行に左右されないシンプルでデザインとスギ材の特性を活かした優れた機能がロングライフな生活用品として愛されて

秋田杉の美しさと 機能性を食卓に

産地の大館市は、秋田県北部の森林資源に恵まれた地域。町を流れる米代川が航路となり、曲げわっぱの生産や流通を支えた。材料には、樹齢100年〜150年の秋田杉が使われている。寒冷地で育った秋田杉は木目が詰まって強度があり、樹齢が高いほど粘りがあるためしなやかに曲げることができる。製作は部材作りから、年輪に対して中心付近を垂直方向に切り出した杙目は、真つすぐ平行に整った木目が見られ、反りや割れが少ないのが特徴だ。杙目のスギ材を薄く剥いだら、2枚のスギ材を重ねる部分に鉋をかけて「はぎ取り」作業を行う。この厚みがピッタリと整合すること

で、曲げわっぱの美しい円形ができあがるのだ。部材ができた後、熱湯に入れて煮沸。水分を含み柔らかくなった材を型や治

具に当てて曲げ、数日間じっくり乾燥し形を固定。接着後、底板を入れたら、合わせ面をサクラの樹皮で縫い留めて完成だ。各社のこだわりや洗練されたデザインが組み込まれ、日々進化を遂げており、曲げわっぱの今日の人気はそうしたたゆまぬ努力の上に成り立っている。

曲げわっぱの使い方にはコツがあるが、木の特性を理解すればそれほど難しい。気をつけるのは、シミや黒ずみの原因になるタンニンやアルカリ性物質を残さないことで、しっかりと湯で洗って素早く乾かすのがポイントだ。手をかけるほどなじんでくれるのが自然素材の良いところで、お手入れする時間、きびきびと長く付き合えるだろう。食を通して、自然素材を暮らしに取り入れる秘けつや豊かさを教えてくれるのが曲げわっぱの魅力だ。

工程

原木の製材・部材取り

はぎ取り・煮沸

曲げ加工・乾燥

接着・底入れ

仕上げ・桜皮とし

使い方のコツとお手入れ方法

無塗装の場合は、使う前に水でさっと濡らす。使用後は、お湯につけてこびりついたご飯などを浮かし、お湯と柔らかいスポンジで洗う。乾燥は、仰向けもしくは横にして1日以上しっかりと乾かす。シミや黒ずみが気になったら、研ぎによるお直しもできる。※仕上げ塗装の有無や各社の製品によって、お手入れ方法は異なる。

曲げわっぱ製作体験



【事前予約】
大館曲げわっぱ協同組合
☎0186-49-5221



産地組合
大館曲げわっぱ協同組合

丁寧で実直なものづくりを ふだんづかいの器として身近に



1.「花塗り」は天候や湿度にあわせた漆の細やかな調整が必要で、ムラなく塗り上げる高度な技術が求められる。
2.湯沢の山麓では、植林された漆の木が大切に守られながら成長している。3.ふっくらとしたフォルムの川連漆器は口あたりも優しく滑らか。

花塗りが魅せる しとやかで優しいお椀

食卓に、あたたかなぬくもりを運んでくれる漆器。湯沢市川連町で作られる川連漆器の落ち着いたマットな光沢とふっくらとした質感は、漆の上塗りを磨かず仕上げる「花塗り」によるもので、手に持ったときの感触もとびきり優しい。気負わず使える親しみやすさと世代を超えて長持ちする丈夫さに、厚い信頼がよせられている。

川連漆器の歴史は、さかのぼること800年前。鎌倉時代、源頼朝の家人小野寺道矩が川連に居住し、刀の鞘や鎧など武具に漆を塗らせたのが始まりとされる。江戸時代には幕府が漆器生産を奨励し、川連でもさまざまな品目の漆器が作られ、沈金や蒔絵などの加飾技法も発展した。川連漆器は木地作りから仕上げまで、すべての工程を半径2キロ圏内で完結できる全国で

も数少ない産地で、顔の見える職人たちによる堅実な仕事が良い漆文化を今に伝えている。

頼りがいのある 日常づかいの器をつくる

生産工程は、原木の木取りから加飾まで大きく分けて7〜8工程。さらに分類すると30もの工程がある。完成までの長い道のりを支えるのは、木地師（挽師・指物師）、塗師、沈金師、蒔絵師など技を極めた職人たちのバトン渡すようにそれぞれの工程を分業することで、質の高い仕事を効率よく進めている。丈夫で長持ちする秘けつは「横木取り」と「燻煙乾燥」。「横木取り」とは、原木を年輪に対して垂直に切る横木を使う木取りのことで、年輪に対して平行に切った縦木に比べて無駄が少なく、縦衝撃に強度があるといわれている。「燻煙乾燥」は、木を挽いたあと燻で乾燥させる方法で、手間も時間もかかる

が、低温でじっくり乾燥させることで木材の収縮率が低くなり、割れや歪みを防ぐことができる。また煙の成分と木材のたんばく質が結合することで木質の強度が上がる、昔ながらの製法だ。素材となる木材はお椀やお皿などの「丸物」にはトチやブナ、お盆や重箱などの「角物」にはホノノキなど奥羽山脈に生息する広葉樹が使われている。

近年は、漆器の軽さと使いやすさを活かしたユニバーサルデザインのお椀やカトラリーも作られている。子どもからお年寄り、障害のある方などが使いやすい形状で、口あたりもなめらかな。本漆には抗菌作用もあることから、その機能性も見直されている。10年ほど前からは、地元のウルシの木から採取した湯沢産の漆で漆器を生産する取り組みもなされている。植林した木から本漆が採れるのは15年後。未来を見据えた漆文化が、大切に育まれている。

工程

木取り・荒挽き

燻煙乾燥

仕上げ挽き

蒔地・漆本堅地

中塗り・上塗り

使い方のコツとお手入れ方法

乾燥をふせぐため、しまい込まずに毎日使ってあげること。洗い終わったら、布巾で優しく拭きと漆に色ツヤが出てくる。漆が剥がれてしまったら、塗り直しもできる。

沈金・蒔絵体験

カンナと呼ばれる沈金刀で漆器の表面に模様を彫り、金粉をすり込む加飾技法の沈金と、筆で漆を塗り、金粉・色粉などを蒔く蒔絵の体験ができる。



【事前予約】
湯沢市川連漆器伝統工芸館
☎0183-42-2410



産地組合
秋田県漆器工業協同組合

冷水希三子 KIMIKO HIYAMIZU

レストランやカフェ勤務を経て独立。季節の食材を使ったやさしい味の料理が評判を呼び、雑誌や広告などで活躍中。蒔絵びや盛り付けに至るまで、その料理の美しさでも注目を集めている。著書に『ONE PLATE OF SEASONS-四季の皿』（アノニマ・スタジオ）、『スープとパン』『ざっと煮サラダ』（ともにグラフィック社）など。

秋田の手しごと、好きなカタチ

冷水希三子さんが選んだ

料理家・フードコーディネーターの冷水希三子さんに、秋田の手しごとから現代の暮らしに寄り添ってこれそうな道具を選んでいただきました。



藤木伝四郎商店
伝統工芸士 米沢研吾 作
たたみ茶碗 木の葉

このパンフレットの大館曲げわっぱ、川連漆器、榎細工のページでスタイルングを担当しました。実際に一つひとつ手にとってみて、秋田の手しごとはきりつと清々しいのに、手にとってみるとすつと手になじむ温もりが大きな魅力だと感じました。なかでもヤマザクラの樹皮が使った加工である榎細工は、属一種の類のない工芸品として秋田県で初めて国の伝統的工芸品に指定されたと聞きました。厳しい冬に耐えて育つヤマザクラは、樹皮が幾層にも堆積して育つことから耐久性にも優れ、奥行きを感じる美しい光沢が特徴的です。

初めて見たとき、この茶碗の物静かなたたずまいに、密度のようなものを感じて目を奪われました。これは磨いた樹皮を何枚も貼り重ね、厚くしたものをさまざまなかたちで彫刻する「たたみもの」の技法を用いたもの。榎細工といえば茶筒など型に巻いて成形する「型もの」、お盆や木箱など木地に樹皮を貼る「木地もの」は見たことがありましたが、このたたみものの断面に見える幾重もの層には吸い込まれるような美しさがあります。樹皮の表情をそのまま生かした霜降皮、研磨した無地皮、一度はいだ樹皮が再生した貴重な二度皮など、手のひらに載るサイズながらヤマザクラの多彩な表情を楽しむのもこの茶碗の魅力。茶さじとして使うほかに、箸置きとして使ってもいいですね。



榎岡焼

青や白など神秘的な発色と、流れる釉薬の動きが目を引く榎岡焼。江戸時代末期、大仙市南橋岡地区で小松清治が築窯。現在は6代目となる小松瀬さんが窯を継ぎ、地元の人材による器作りを営む。素地は大仙市内で採った粘土を精製して作り、釉薬は男鹿半島で採った白土にナラの木の灰とワラの灰を混ぜて調合している。調整が難しい天然原料によって生みだされた、海鼠釉の美しい色合いは、秋田の豊かな大地を感じさせる。代表的な片口やすり鉢、ご飯が食べやすい浅型茶碗、納豆鉢など、秋田の食文化と調和する器も作り継がれ、雪深い地の食卓に彩りと楽しみをもたらしている。



有限会社 榎岡陶苑
〒019-1846 大仙市南外字製木田344-1
☎0187-73-1018 (陶芸体験あり/要予約)



秋田塗

秋田塗は秋田市で製作されている漆器。昭和初期に加納民太郎が秋田塗として製作を行っていたものの、戦後まもなく製作されなくなった（当時の秋田塗は秋田市立赤れんが郷土館で見ることが可能）。現在は、齋藤國男さんが「秋田でつくられている漆器」として秋田塗の製作を行う。幾重にも漆を重ね塗りした「堆漆」を施したうえで、表面を研ぐことによってさまざまな模様を生み出す「研ぎ出し」の技法が特徴。伝統漆器の技法を基調としながら、現代的なデザインを取り入れた製品が生み出されている。漆のつやと彩りを活かした、色鮮やかな製品は装飾品としても重用される。



手しごと秋田
秋田塗

製作/漆芸工房霽藤
〒010-0065 秋田市沢島7丁目1-7
☎018-863-5737
(製作体験あり・要予約)

白岩焼

混ざりあう青と白の濃淡が美しい白岩焼。カップ、平皿、茶碗、花器など、表情豊かでみずみずしい色調のうつわが作られている。江戸時代後期に相馬焼の陶工松本運七が仙北市白岩地区に開窯したのが始まりで、佐竹藩で初めて御用窯として陶器を製作。どぶろくやしょうゆなどを入れるスズとよばれる容器やかめ、徳利や茶器など、献上品から日用雑器には6つの窯元があったとされる。時代の変化や大地震の影響で明治時代にはすべてが廃窯となったが、白岩焼をこなく愛する人々によって歴史が語り継がれ、昭和50年に窯元の末いで陶芸を学んだ渡邊すなおさんが夫の敬明さんと築窯。70年の時を経て復興したのが白岩和兵衛窯だ。

素地を作る粘土や茶色に焼き上げる土釉には白岩の土が使われており、深みのある青色の釉薬は表面がナマコの肌合いに似ていることから「海鼠釉」とよばれている。土の鉄分と釉薬に混ぜた灰が窯のなかで化学変化を起こすことで生み出される絶妙な発色は焼成時の温度で表情が変わるため、窯の中の位置によって釉薬の配合を変えるなど、細やかな配慮がなされている。

現在は、復興後2代目となる渡邊葵さんが中心となり、金彩を取り入れたデザインや洗練されたフォルム、より美しい海鼠釉の表現に挑戦している。創意工夫あふれる精神は、白岩焼の歴代の陶工たちと重なるものがあり、この地に息づく伝統と格式を守りながら新たな歴史を刻んでいる。



白岩焼和兵衛窯
〒014-0302 仙北市角館町白岩本町36-2
☎0187-54-4199 (ギャラリーあり/要予約)



受け継がれてきた美が
現代の暮らしに寄り添う

1. 樹皮の合わせ目となる「ブ
チ目」を作るところ。2. 樹皮
の種類は、無地皮、霜降皮（チ
ラシ）、金皮、銀皮、胎皮、ひ
び皮、二度皮など10種類以
上ある。3. 蓋や本体の縁もき
れいに仕上げて樹皮を貼る。
4. 伝統工芸士の米沢研吾さん。
熱したコデで本体に樹皮を貼
る「樺貼り」の作業。

磨き抜かれた 唯一無二の桜皮細工

琥珀色の深い輝きが、上品な
印象を与える樺細工。木目のゆ
らぎは、月のきらめきや雲海な
ど豊かな情景を連想させる。素
材に使われるのは、ヤマザクラ
の樹皮。耐久性があり防湿性に
優れているため、湿気に弱い乾
物などの風味や鮮度を保つ容器
として古くから親しまれてき
た。ヤマザクラは古語で「かに
は」、それが後に「かば」になっ
たというのが樺細工の語源だ。

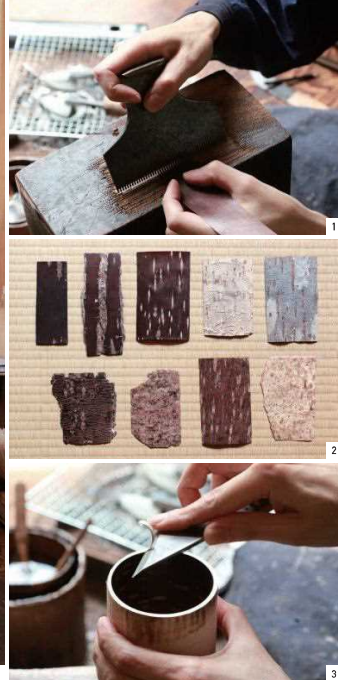
作られているのは、しだれ桜
や武家屋敷など情緒ある街並み
で知られる角館。江戸時代中期
佐竹北家によって秋田県北部の
阿仁地方から角館に技法が伝え
られ、武士の手内職として普及
し産業として発展した。人気の
製品は時代によって移り変わ
り、江戸時代は献上品としての
印籠（薬入れ）、明治時代は朋乱
（さざみ煙草入れ）とキセル入

れ、大正から昭和は茶筒や茶道
具、そして箱物や飾り棚など大
型の製品が作られるようになって
きた。軽くて持ち運びやすい小物
から、暮らしを彩る品々へと変
化したのだ。現在は角館のみに
伝わる類のない工芸として、伝
統工芸士と自社工場を持つ同屋
が、伝統と格式を大切に守って
いる。

原材料は、山で採集している。
東北の厳しい自然環境に生育す
るヤマザクラは、樹皮が幾層に
も堆積して育つため耐久性に優
れ、光沢もひとくち美しい。製
作は、茶筒など型に巻いて成形
する「型もの」、お盆や木箱な
ど木地に樹皮を貼る「木地も
の」、樹皮を積層状に貼り重な
て磨く「たたみもの」によって
異なるが、いずれもまずは樹皮
の表裏を専用の包丁で削る。色
合いがでたらニカワを塗り、熱
したコデで芯となる本体に慎重
に貼っていく。ブチ目組みや小
縁貼りなど、樹皮の合わせ目や

近年は茶筒に加えて、紅茶入
れやコーヒーキャニスターな
ど、現代の暮らしにあう食器や
カトラリーも作られ、天然木と
しての存在感を発揮する。樺細
工ならではの蓋の優しい開閉は
日常にふとした安らぎをもたら
し、使うほどに色ツヤの深みが
増す美しい経年変化は、木と
ともに年月を刻み楽しさを教えて

細部にまでこだわった丁寧な仕
事が、樺細工の上品なたたずま
いと耐久性を作りだしている。
形ができたらトクサで丹念に磨
き上げ、ようやく完成。ひとつ
として同じ樹皮模様がないから
こそ、持ち味をどう生かすかが
職人の腕の見せどころだ。遊び
心のある意匠をこらした樺細工
が多いのは、職人に委ねられた
自由度の高さと、問屋が産業を
支える仕組み、そしていつの時
代も人々がヤマザクラの樹皮を
愛でながら作り、使われてきた
からだろう。



工程
樺はぎ・樺削り
↓
膠塗り
↓
仕込み
↓
組み立て・貼りつけ
↓
仕上げ（磨き）

使い方のコツとお手入れ方法

茶筒など、磨いて仕上げた製品は無塗装のため、
手で触ることで樹皮のツヤが深くなる。両手で
茶筒をなでながら、毎日使うのがおすすめ。樹
皮のはがれや本体の歪みは、お直しもできる。

製作見学
伝統工芸士による樺細工の製作を
見学できる
入館料：300円（小・中学生150円）

仙北市立角館樺細工伝承館
仙北市角館町表町下丁10-1
☎0187-54-1700

産地組合
角館工芸協同組合



秋田銀線細工

精緻な模様と落ち着いた輝きが上品な秋田銀線細工。リング、ペンダント、ピアスなど、銀線が奏でる軽やかなデザインが特徴で、銀特有の風合いがジュエリーとしての存在感を際立たせる。古くは江戸時代初期から院内や阿仁の鉱山で産出された銀を用いた金属工芸が盛んに作られていたが、銀線細工として技やデザインが確立したのは明治後期から昭和初期にかけて。時代のスタイルや流行にあわせた華やかな装飾品や工芸品などが作られてきた。

製作
・株式会社竹谷本店 ・銀線細工とろ
・金銀線工房しんどう
・矢留彫金工房 ・工房



手しごと秋田
秋田銀線細工

製作は緻密な作業の連続で、糸のように細い0.2ミリほどの銀線を燃らしあわせることから始まる。銀線は燃えることで表面にできた細かな凹凸が優しい光を放ち、加工しやすい柔らかさになる。この銀線で「平戸」とよばれる渦巻き状の模様をつくるのが銀線細工の特徴で、それらをモチーフの形状となる銀枠のなかにはめ込んでいく。形ができたらガスバーナーで熱し、銀口で固定。仕上げ磨きをして完成となる。指先の鋭敏な感覚を頼りにした手仕事で、職人の卓越した技と感性によって生み出されていく。

デザインは花や鳥などの自然をモチーフにしたものが多いが、近年では秋田米やいぶりがつことなど秋田らしいデザインのジュエリーも作られ銀線細工の可能性を広げている。銀の白く明るい輝きは、冬の晴れ間にみられる秋田のまばゆい雪景色に似たものがあり、いつの時代も見入る人々の心を癒している。



大曲の花火協同組合
〒014-0073
大仙市内小友字山根89番地31
株式会社花火創造企業内
☎0187-73-5101



大曲の花火

大空に大輪の花を咲かせる打ち上げ花火。日本古来の丸い花火は「割物」とよばれ、一瞬の色彩、配色、形、動きに、職人の全精力が注がれている。大曲の花火の始まりは諸説あるが、江戸時代には火薬の伝来や祭礼と結びついて作られたとされる。秋田県大仙市で例年8月最終土曜日に開催される全国花火競技大会は、明治43年の「奥羽六県煙火共進会」が始まりで、現在でも全国から優れた花火師が集まり腕を競う。昭和38年には創造花火が発案され、既成概念にとらわれない花火の自由な表現と音楽を取り入れた効果的な演出が高く評価され、各地に広まった。花火の製作は、「星」とよばれる火薬の玉を作ることから始まる。発

光する色の薬剤をかけて火薬の層で玉を太らせ、乾燥したら玉皮とよばれる紙製の型に詰めていく。玉皮を合わせて球体にし、外周を紙などで貼り合わせてたら完成。花火の原理は、上空で火薬が燃える炎色反応によるものだが、その元になる花火玉の製作はほとんどが手作りで、職人による熟練の技と創造力が頼り。技術の進歩はめまぐるしく、割物のなかでも伝統的な「菊物」や「牡丹物」に加え、二重三重に球体が広がる「芯物」の構造はより複雑化し、近年は6つの球が重なる「五重芯」が作られている。打ち上げは、天気や湿度、風力に出来栄えが左右されるが、秋田の絶景と観客を味方につけ、一期一会の芸術作品が完成する。

INFORMATION

秋田市の工芸品 展示のご案内

秋田市の工芸品は秋田市立赤れんが郷土館 勝平得之記念館1階の「秋田市の工芸品」展示コーナーでご覧いただくことができます。
【展示例】漆目銅／秋田銀線細工／秋田塗／八幡人形／秋田湯指／ガラスアートなど



1. 八幡人形の工房風景 2. 漆目銅の作業風景 3. 秋田塗の作業風景



秋田市立赤れんが郷土館
勝平得之記念館
〒010-0921 秋田市中心3丁目3-21
☎018-864-6951
観覧料：210円（20人以上の団体160円）、
高校生以下無料
開館時間：9:30～16:30
休館日：年末年始（12/29～1/3）、
展示替え期間（不定期）

アクセス：秋田中央交通バスで「川反入口」下車徒歩約1分／JR秋田駅西口から徒歩約15分／秋田中央インターチェンジから車で約20分 ※文化施設へのアクセスやお買いものに便利な中心市街地循環バス「ぐるる」でもアクセスできます。



秋田市工芸振興協議会



漆目銅

銀・銅・赤銅などの異なる金属が織りなす模様が木目のように現れてくることから、漆目銅（金目金・木目銅とも）と呼ばれる、秋田市で生産されている金属工芸品。江戸時代前期に考案されたものという戸、刀の柄や駒などが作られていたといわれている。色の異なる複数の金属を材料として、熱や圧力を加えて融着し、成形、研磨を経て製品が生み出される。秋田は阿仁鉱山や院内鉱山が存在したことから、金属工芸品が盛んに作られた歴史がある。漆目銅は一時途絶えたものの、明治期に復元され、現在では美術工芸品、花器、アクセサリーなどが製作されている。



手しごと秋田
漆目銅

製作／千貝工芸
〒010-1612 秋田市新屋敷町9-32
☎018-863-5803



秋田八丈

鷹の羽毛を表す雫色（茶色）と、淡みのある黄色を伝統色とする草木染めの絹織物。秋田市の海岸地帯に生息するハマナスの根や湯沢市に生息するカリヤス、北秋田市のヤマツツジなど身近な植物で染料を作って絹糸を染色し、それらを織機で織り、反物を製作している。ハマナスの根は雫色に、カリヤス、ヤマツツジは黄色に染まる。絹ならではの光沢と上品な縞模様が特徴だ。始まりは江戸時代中期。陸奥の国から舞臺・製糸・絹織物の技術が伝わり、秋田独自の染料が開発された。秋田市の染織工場が開業したことで一度は途絶えかけたが、技を伝承する奈良田登志子さんが2006年に北秋田市に拠点を移して復活させた。



手しごと秋田
秋田八丈

製作／こむ工房
〒018-3301 北秋田市蔵子字戸草沢29
☎0186-62-0118



浅舞紋り

横手市浅舞地区で作られる藍の絞り染め。布の一部を糸でくくり、絞りをかけたその部分を染料が入らないように染める伝統技法で、江戸時代には技術が発展、清水が豊富な横手市は木綿の生産も盛んで、染物屋も多かった。花雲、鶴亀、ぼかしなど、模様や表現の幅が広い絞り染めの着物は、藍と白のコントラストが爽快感に次ぐ暗れ着として親しまれた。絞り染めは、糸の太さやくくり方によっても雰囲気が異なるため、意のままに染めるためには高度な技術と経験を要する。一時は途絶えてしまったが、昭和57年保存会が発足して復活。現在は、普段使いのシャツやハンカチ、テーブルセンターなどが作られている。



手しごと秋田
浅舞紋り

製作／浅舞紋り藍染め保存会
☎0182-24-2266（代表 佐野）



日常の道具に息づく
自然と伝統に培われた叡智

暮らしの知恵を
今に届ける
『正直』なもののづくり

秋田杉で作られた美しいいたず
まいの秋田杉桶樽。胴体をしっか
り固定する竹のタガが桶樽の象徴
で、貯蔵や醸造、運搬用の容器と
して使われている。桶樽の歴史
は、戦国時代のものといわれる桶
の一部分が遺跡から発掘されるほ
ど古く、室町時代には円筒型にな
り、一般に普及したとされる。江戸
時代には佐竹藩の保護のもと技術
が発展し、明治から昭和初期に
かけて需要が拡大。日本海航路の
各地に流通した。プラスチックや
ビン、缶が新素材として登場する
以前は、洗い桶、おひつ、たらい
、酒樽、漬物樽など生活必需品と
して広く作られ、現在は暮らしに
潤いを与える工芸品として親しま
れている。

材料に使われるのは、伸び縮み
が少なく狂いやゆがみが生じにく
い高樹齢材の秋田杉。軽くて使い
やすい、細かな木目やさわや
かな杉の香りが魅力だ。良質な天
然秋田杉が生息する米代川流域の
秋田県北部が産地で、現在は能代
市、北秋田市、大館市で作られて
いる。

桶と樽は、そもそもの用途が異な
る。固定した蓋のないものが桶
で、蓋のあるものが樽と区別され
る。つまり、たらいなど貯蔵用の
容器は桶、酒樽など運搬用の容器
を樽とよんでいるのだ。製作はカ
マとよばれる弯曲した鉋で原木
を割り、樽とよばれる桶胴状の部
材作りから始まる。樽は中心から
外に向かって削り出した鉋目、樽
は中心から接線方向に削り出した
板目が使われており、それらに正

直とよばれる鉋をかけて形を整え

る。外周に応じて樽の数を決めた
ら輪のように立てて組み合わせ
、竹で編んだタガをかける。鉋と呼
ばれる両手挽きの鉋で胴体の形を
整え、底板や蓋を付けたら、さらに
磨いて完成。正確さが求められる
る削りや磨きの作業は、桶樽特有
の道具使いと経験に裏付けられ
た勤が頼り。水密性が高い樽は、運
搬中の液体の揺れを最小限にする
ため中央部を膨らませる工夫がな
されているが、スギ材が水分を含
み膨らんだ状態を想定しながら形
成しなければならぬ。こうして
組み立てられた桶樽は、タガを外
せば胴体がばらばらになり樽に元
通り、適度な厚みがあるので削り
直しもでき、直しながら使い続け
ることができる恵の製品だ。
プラスチック製品の登場により
桶樽の需要は減少したが、時代が
めぐり、近年、再びおひつや漬
け物樽が注目されている。吸水性や
断熱性に優れたおひつは、ご飯の
余分な水分を吸収するためお米本
来のおいしさが引きだされる。桶
樽とともに、暮らしの知恵や秘伝
のレシピ、そして秋田が誇る風土
文化を今に伝えている。



秋田県立博物館所蔵



あけび蔓細工

雪国で育つあけびの美しさ
と弾力を生かして作られたあけび蔓
細工。もともとは農家の自家生産
だったが、作り手の多かった旧仙
南村（現美郷町）、鹿角市花輪、旧
鳥海町猿倉、現由利本荘市は産地
として発展、名工も生まれた。農
作業に使う「だし」や、しょうゆ
や酒などの瓶を入れて持ち歩く
「びんかこ」が当時の定番で、それ
が現在の手かこに、一定の幅を開
けて編んだこだし編み（寄せ編み）
は軽やかで上品な印象だ。山の恵
みに感謝しつつ丹精こめて作られ
るあけび蔓細工。材料はミツバア
ケビの蔓。カマで採集し、天日干
し、陰干しと乾燥を繰り返す。さ
らに余分な葉やこぶなどを丁寧に
ハサミで切り落とし、それらに蔓
の太さを均極めながら編まれる。

主な産地
横手市、由利本荘市など

使い方のコツと お手入れ方法

使用前はぬるま湯で濡らし、柔ら
かい布で拭く。使用後は、ぬるま
湯または水で洗い、柔らかな布で
拭いてから陰干しする。乾燥して
すぎまが生じてしまったら、水に
浸すと元に戻る。シミや汚れが気
になったら、お直しもできる。

工程

杉丸太を割る

短冊状の板樽を作る（柎目・板目）

樽を外鉋・内鉋で整える

輪状に立て、仮タガをする

仮タガを外し竹タガをかける

底板や蓋をつける

仕上げ

生産者

・桶樽工房 あき ・有限会社 樽高かまた
・清水桶屋 ・有限会社 日樽
・能代製樽株式会社



産地組合
秋田杉桶樽協同組合

うちもの 打刃物

現在は包丁や鉋、農具などが主
に生産されている。地金と鋼から
なり、地金と鋼に加熱し手打ち作
業を繰り返して、製品に成型し、焼
き入れや研磨作業などを経て製品
となる。各地の打刃物の成り立ち
には、地域性が色濃く反映され、
山間部では山仕事の道具や狩猟用
の武器、沿岸部では農具や漁具な
ど、地域の生活ニーズによってさ
まざまな道具・製品が生産されて
きた歴史をもつ。北秋田市では、
かつて地域で狩猟を生業としてい
た「マタギ」が使用していた、狩
猟用の山刀を生産しており、現在
では万能刀として山歩きなどアウ
トドア愛好家にも人気が高い。



手ごと秋田
打刃物

主な産地
北秋田市、秋田市、五城目町など



曲木家具

秋田曲木製作所(のちの秋田木工)は、曲木家具専門メーカーとして1910年に設立。以来100年以上もの間、日本の生活様式や秋田の風土、それに根ざした建築と西洋家具の歴史をつむいできた。曲木は高い強度をもったしなやかな曲線をもて表現することで高いデザイン性を実現した技術。丸太から削り出すのに比べると材料の無駄も少なくて済む。

曲木家具に使われるのはブナやナラ。作業は自然乾燥させた材料を切り出す木取から始まる。曲木の作業では90℃の蒸気で熱し、柔らかくなったブナの製材を金型にはめる。3次元の曲木加工は熟練の職人が二人かりで息を合わせて行う。曲木の後の切削では南京カンナで丸みを出したり、太さを調整したりする。やすりをかけてさらに表面をなめらかにしていく研磨。部材を組み上げる組み立て、塗装、仕上げなど幾重にも積み重なった手仕事で、プロダクトとしての強さを生み出していく。

2020年度グッドデザイン賞を受賞したダイニングチェア「MAGEKO」はひと筆書きのような軽やかな曲線を描くことで、曲木の魅力を際立たせたデザイン。小さな肘掛けは、省スペースでテーブルと合わせやすく、現代の住宅にフィットする。機能性や実用性、なによりその美しさは、長い伝統と高い技術を磨きながら、自らを柔軟に刷新してきた秋田木工のものづくりの姿勢の表れと言える。



秋田木工株式会社

〒012-0862 湯沢市間口字川前177 ☎0183-73-0123

見学／本社ショールームのほか、工場での家具製作の様子を見学することも可能(要予約)



十文字和紙

湧水や河川など、水資源が豊富な横手市十文字(じゅうもんじ)町で作られている手漉き和紙。原料は自家栽培の楮(こうぞ)と山に生息するノリウツギで、製作過程では多くの水を要する。十文字では、江戸時代中期から慶応期の冬仕事として紙漉きが始まり、良質で強靱な和紙は提灯や傘、障子紙などの日用品として使われた。現在では、3代目佐々木清男さんが十文字和紙愛好会の仲間らと11月から3月にかけて製作。工程は、楮刈り、槽ふかし、皮はぎ、粗皮とり、煮熟、ちりとり、槽たたき、紙漉きと手間がかかるが、そのすべてが200年前と変わらない製法で作られている。紙の源流を感じられる稀少な手仕事だ。



手しごと秋田
十文字和紙

製作／十文字和紙 佐々木清男

〒019-0515

横手市十文字町谷地新田字中村93

☎0182-44-3520



組子細工

接着剤やねじ・くぎなど一切使わず、職人が手作業で組手を精密に組み合わせることで、模様を編み上げる組子細工。建具の技術が元となっており、建具としての組子を製作している事業者は県内に広く存在している。組子細工は、「組手」といわれる細く薄い棒状の木材を精巧に組み合わせて美しい模様を編み出していく。使用する木材は主に針葉樹で、秋田杉、サワラ、ヒバ、ヒノキ、ホオノキ、神代杉(埋もれ木の杉で灰色がかったもの)など、麻の葉柄や胡麻柄などの古典柄からオリジナルの柄まで幅広い柄がある。現在では建具のほか、装飾品、衛生活などに技法が生かされている。



手しごと秋田
組子細工

製作／秋田県建具組合連合会

〒013-0306 横手市大雄字田村66-5

(株式会社小松木工内)

☎0182-52-2149



県指定 イタヤ細工

白木の優しい肌合いとシンプルな形が使いやすい。かこやざる。軽くて丈夫なところがイタヤ細工の持ち味だ。発祥は諸説あるが江戸時代からおよそ200年、仙北市雲然地区における稲作の副業として営まれてきた。穀物を運び分ける箕を主力商品として、おぼき(深めのかこ)、かつこべ(腰にさげるかこ)などが作られ、行商によって広まった。材料はイタヤカエデの若木。雪が降り

始める前の11月、山に入ってイタヤカエデを採取したら、すぐ部材作りに取りかかる。水分を含んでいるうちに幹に鉋を入れ、年輪を剥がすように厚みを一定にする。仕上がりの美しさに一定にするのが仕上がりのために、カツチャとよばれる小刀での面取り作業も欠かせない。編み方は、四ツ目編み、網代編み、枳形編みなどがあり、形や用途に応じて用いられる。無塗装のため作り立ては白い木肌を楽しむことができ、十年、数十年経つときれいな艶色に変化する。こうした経年変化もイタヤ細工の魅力のひとつだ。

近年は、バンかこやカトラリー入れなど今の暮らしに取り入れやすい形も作られている。素朴でありながら強靱なたくましさがあるイタヤ細工は、豪雪地を生きる人々のしなやかな強さが感じられる手仕事だ。子どもの玩具として作られた「イタヤ馬」や「イタヤ狐」も、時代を超えて愛されている。

製作

角館イタヤ工芸

〒014-0341 仙北市角館町雲然荒屋敷182-7

☎0187-55-4367

民芸イタヤ工房

〒014-0341 仙北市角館町雲然荒屋敷231-1

☎0187-53-2609

※いずれも店舗ではありません



手しごと秋田
イタヤ細工

川連こけし

おかつば頭に着物をまとった素朴でかわいいう川連こけし。胴体には襦袢や井桁などの着物模様や菊や梅などの花模様を描かれている。東北の伝統こけしを産地で分類する系統では「木地山系」に属し、湯沢市木地山で作られたものを「木地山系木地山こけし」、ふもとの川連町で作られたものを「木地山系川連こけし」と呼ぶ。始まりは明治時代初期、木地山に住む木地師がこけしを作り始めたのがきっかけ。その後、国の政策で木材伐採が制限されたため、木地師の多くは山を降りて、漆器作りが盛んな川連町に移り住み、漆器の木地を作るかたわらこけしが作られた。大正時代には地元湯沢場のみやげものとして人気になり、昭和30年代に

は第2次ブーム、そして今また昭和レトロな風情に注目が集まる。素材に使われるのはイタヤカエデ。節が少なくなる目が細かく、磨き上げるの白く美しい光沢がある。製作は、原木を口口で削いて原型を作り、染料で着色し仕上げに染引きをする。胴体は一本の木から削り出す「つくりつな」の構造で、頭部と胴体が首でつながっているのが特徴だ。手作業で作られるため工人の嗜好や力量が表れやすく、歴代の工人によって個性豊かなこけしが生みだされてきた。それらは小原康一郎型、小椋石蔵型、種彦治「型」として大切に作り継がれている。



手しごと秋田
川連こけし

製作／秋田県こけし工人会

〒012-0822 湯沢市字下山谷225-1

☎0183-72-2031



中山人形

なかやまにんぎょう

柔らかな表情と鮮やかな色彩が
暮らしに彩りをそえる



素朴な風合いで描く
郷土色豊かなモチーフ

土のあたたかな風合いと鮮やかな色彩が見る人を和ませる中山人形。雛人形や天神様などの節句人形から秋田の行事や風俗を題材にしたものまで、郷土色豊かな土人形が作られている。

明治時代初期、中山窯の陶工野田宇吉の長男の妻である樋渡ヨシが、押し絵や串あねこ（姉様人形）を元にしたのが中山人形の始まりとされ、近郷の祭りや朝市で売られた。昭和中期には、3代目樋渡義一によって秋田の行事や風俗をモチーフにした秋田犬、かまくら、ハタハタ、梵天などが作られるようになった。歴代の型は200種類ほどあり、その一部が今でも製作されている。

現在では、5代目の樋渡微さんが製作から出荷まで、すべてを一人で担う。製作工程は、石膏型に粘土を詰めて型抜きしたあと、合わせ目を削って成形。乾燥後に約800度の窯で素焼きし着色する。着色は、表面を美しく仕上げるための地塗り、下塗りをしてから、顔や模様などを描く。精巧な美しさは、細やかで丁寧な仕事の積み重ねの賜物だ。長く親しまれてきた郷土玩具は、のびやかな表情で郷土の風景を今に伝える。

製作／樋渡人形店
〒013-0049
横手市駅西2-3-10（工房）
☎0182-32-1560



手しごと秋田
中山人形

能代風

平安時代から続くといわれる伝承風。江戸時代には、武将などを描いた「武者絵風」が作られ、明治初期にはあつかんべーと舌を出す「べらぼう風」が作られるようになった。いずれも大胆な構図と鮮やかな色彩で、風の全面に顔が大きく描かれているのが能代風の特徴だ。「べらぼう風」は、歌舞伎の隈取りをして頭に芭蕉の葉を描いた「男べらぼう」や牡丹の花が描

かれた「女べらぼう」などがあり、悪いものを遠ざける魔よけとして親しまれている。語源は江戸言葉の「べらぼうめ」や「べらんめえ」。能代は海から強い風が吹くため、骨の数をもくした強風の的風と弱風の帆風があり、上空で風をとらえて、勇壮に空に揚がる姿がみられる。毎年4月には「能代風揚げ大会」が開催され、風文化が大切に守られている。

湯沢風

江戸時代から続く伝承風で、京都の錦絵をもとにした「武者絵風」と佐竹商家の武士・阿王平馬が創業した「まなく風」がある。まなくとは目玉の意味で、殿君のような風絵は当時刺されると死に至ることも多かったツツガムシ退治を願うために描かれた絵がもたらしている。縦骨一本に対する横骨3本、幹骨なしと竹骨の構造がシンプルで尻尾もないため、糸の引き具合によって急降下や回転など、自在に動かすことができる。機動性・操作性に優れた特徴を生かして、糸切り具の「カマ」を仕込むと合戦風としても楽しめる。秋田の長い冬がようやく終わる3月に揚げるのが恒例で、毎年風揚げ大会も開催。「春を呼ぶ風」として親しまれている。



製作／湯沢風同好会
〒012-0857
湯沢市千石町3-2-40（工房・春風館）
☎0183-73-9428

手しごと秋田
湯沢風



北村風提灯店
〒016-0811 能代市日吉町7-3
☎0185-52-7978



本荘ごてんまり

ハレの日やお祝いごとを華やかに演出してくれる本荘ごてんまり。江戸時代に本荘城の女中が作って遊んだものが庶民に伝わったとされ、球体の三方に下げられた房が特徴だ。芯にはもみ殻が使われており、程よく重い。それに木綿糸を巻いて球体を作り、地割りといわれる案内線を入れ、さらにびやかな刺しゅう糸で模様を刺している。菊、桜、花火といった伝統模様から創作模様まで表現の幅が広い。由利本荘市で開催される「全国ごてんまりコンクール」には、全国から約300点のごてんまりが集まり、会場を彩る。幸せを願いながら一針一針に込めた思いが、優美な輝きに表れている。



由利本荘市観光協会
〒015-8501
由利本荘市尾崎17
☎0184-24-6349

製作
由利本荘市御殿まりを愛する会
☎080-3191-9294